

人間学の探究 (9) ～人間の定義 (3) ホモ・シグニフィカンス～

山 岡 政 紀

1. はじめに～人間の定義シリーズから

生物分類学では上位から順に、界、門、綱、目、科、属、種という階層的な分類法が採られている。各生物種の諸言語における呼称は当然ながら言語ごとに異なるが、生物分類学上の学名は通言語的に統一する必要がある。そして現行の学名にはラテン語を用い、属を表す名詞と種を表す形容詞の組み合わせによって構成することが通例となっている。種とは生殖的な交配が可能な最も下位の分類単位である。

我々人間という種の学名はホモ・サピエンス (*Homo sapiens*, 英知人) であるが、これはホモ属のサピエンス種という意味である。ホモ属にはかつてホモ・ハビリス (*Homo habilis*, 器用人) やホモ・エレクトゥス (*Homo erectus*, 直立人)¹などの他種が存在したがそれらはすべて絶滅し、現在のホモ属はホモ・サピエンスのみの一属一種となっている。

ホモ・サピエンスの学名は18世紀スウェーデンの植物学者リンネ (*Carl von Linné*, 1707-1778) が付与したものである (*Linné* (1735) 『自然の体系』)。彼は人間を定義づける言葉として形容詞“*sapiens*” (知恵ある) を採用したのである。

その後の哲学者や思想家らは“*sapiens*”を別のさまざまな形容詞に入れ替えてホモ・ロクエンスやホモ・ファーベルといった別の語で人間を呼称する

ことを提案した。それらはもはや生物分類学上の学名としての代案というより、「人間とは何者か?」、「人間という種が他の生物種と隔絶する最も特異な特質とは何か?」という問い、即ち人間の定義をめぐる百家争鳴の論争として展開されていった。そのうちの主たるものについて本シリーズでは考察を重ねてきた(表1)。

表1 人間の定義と初出出典の一覧

人間の定義, 和訳	初出の出典とその著者	考察
Homo sapiens, 英知人	スウェーデンの生物学者リンネ『自然の体系』1735	(1)
Homo loquens, 発話人	ドイツの哲学者ヘルダー『言語起源論』1772	(2)
Homo oeconomicus, 経済人	イギリスの経済学者スミス『国富論』1776	
Homo phaenomenon, 現象人	ドイツの哲学者カント『純粹理性批判』1781/1787	(1)
Homo noumenon, 本体人		
Homo faber, 創造人	フランスの哲学者ベルクソン『創造的進化』1907	(1)
Homo ludens, 遊戯人	オランダの歴史家ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』1938	(1)
Homo petiens, 苦悩人	オーストリアの精神科医フランクル『苦悩する人間』1950	(1)
Homo significans, 記号人	フランスの文化記号学者バルト『エッセ・クリティック』1964	(3)
Homo religiosus, 宗教人	ルーマニアの宗教学者エリアーデ『世界宗教史Ⅱ』1976	

「考察」は本シリーズの論考。(1)は山岡(2009)、(2)は山岡(2024)、(3)は本稿を指す。

本稿の前編に当たる山岡(2024)ではホモ・ロクエンス(Homo loquens, 発話人)について考察した。本稿ではその革新的な発展形とも言えるホモ・シグニフィカンス(Homo significans, 記号人)について詳しく考察したい。

2. ヘルダーとホモ・ロクエンス

人間の知的活動のなかでも特に言語能力に焦点を当てるのがホモ・ロクエンスであった。その起源はリンネと同じ18世紀に、ドイツの哲学者ヘルダー

(Johann Gottfried Herder, 1744-1803) が Herder (1772) にて提起したとされており、ホモ・サピエンスからの変更が最初に提案された「第二の人間の定義」と言えるものであった。

ヘルダーに先立って同じ18世紀に人間学 (Anthropologie) を提唱したカントは、人間の理性の実現形態が言語であり、理性と言語とは表裏一体だと考えていた。人間だけが形成する概念も、論理という構造も、その働きはすべて言語によって構築され、体系化する。こうしたカントの言語観を継承したのがヘルダーだった。

ヘルダーは当時のキリスト教的世界観のなかで広く信じられていた「言語神授説」に対抗するアンチテーゼとして「言語起源論」を提起した。当時のキリスト教神学者はヨーロッパの諸言語が共通して有する24の音韻の秩序立った美しさを根拠として、人間の自然言語は神が授けたものであるとしていた。人間は神の似姿であるがゆえに尊く、そして人の言葉もまた神に授けられたがゆえに尊い。それが彼らにとっての「人間の尊厳」だった。

ヘルダーもまた敬虔なキリスト教徒ではあったが、北米のアベナキ族の言語、南米のペルー語、アマゾン川流域の言語、アジアのシャム語等々、インド・ヨーロッパ語族以外の語族に属する諸語の音韻が如何に多様であるかについて述べ、それらが動物の唸り声のような発声からそれぞれの民族文化の生活慣習に従って自然発生的に分節と意味付与を同時に行い、その結果として自然言語が成立していったと主張した。このように自然言語は神から授けられたものではなく自らの力で獲得したものであり、そのような言語獲得能力こそが人間を人間たらしめる根源の力であり、真の「人間の尊厳」であると主張した。この主張はその数十年後に出現するダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) の生物進化論に先立つ自然言語版の進化論とも言えるものであった。

もっとも、このように歴史に有意義な足跡を残したヘルダーではあったが、あくまでも彼の言語論は哲学理論として述べられたものであり、具体的な言語の音韻構造や文法構造にまで踏み込んだ本格的な言語学の確立は後世に譲

ることとなる。時を隔てて19世紀以降に言語学者ブルームフィールド(Leonard Bloomfield, 1887-1949)らは世界の未知の諸言語を採取し、記述する方法論を發展させ、アメリカ先住民の言語の構造をその方法論によって明らかにしていった。彼らの流派は構造主義言語学と呼ばれる。これによりかつてヘルダーが論じた諸言語の音韻の多様性が詳細な言語記述をもって論証されるに至った。そしてホモ・ロクエンスの立場から言語能力を人間の定義と主張する系譜は今日まで続いている。

3. ソシュールと記号学

時代が前後するが、構造主義言語学をはじめとする現代言語学の基礎を築いたのは19世紀から20世紀にかけて活躍したスイスの言語学者ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)であった。ソシュールは言語学の歴史において初めて本格的に意味の研究に着手した人物だが、そのことによって現代言語学を發展させると同時に、全く新しい記号学(仏sémiologie, 英semiology)を創出し、分岐した二つの学問の両方の祖となった。

言語を構成する二大要素が〈形式〉(form)と〈意味〉(meaning)である。そして両者は、相互にその存在を依存し合う文字通り表裏一体のものである。このうち〈形式〉は一次的には人が声帯と唇、歯、舌などを用いて生成する聴覚表象の「音声」であり、二次的には線と点の組み合わせによって生成する視覚表象の「文字」である。この音声あるいは文字という〈形式〉を通して人が表現したり解釈したりする主観的想念が〈意味〉である。

言語学者は自然言語が持つ〈形式〉(form)と〈意味〉(meaning)の関係にかねてより関心を持っていたが、常に言語形式の側から見ていたからその考察対象は言語を離れることはなかった。しかし、ソシュールは〈意味〉の側から考察することを始めた。そうしてみると、〈意味〉を担っている形式は決して言語だけではなく、人間の日常の文化、生活、主観世界に満ちあふれていることにソシュールは気づいた。むしろ人間にとって〈意味〉の最初の一步は、

まったく言語と関係ないところから始まっている。それは、見えている現象から別の事象を読み取ることである。例えば、人は「煙」を見て「火」を知り、「血」を見て「傷」を知ることができる。世界の事象間の因果関係を概念の属性として記憶しているから、一つの事象から別の事象を想起することができる。これが人間にとっての「意味」の原初である。これをもって、「煙は火を意味」し、「血は傷を意味」する、という形で「意味」という言葉を動詞として用いることもできる。この場合、目に見えている客観的現象の「煙」、「血」が「形式」であり、一方の心のなかに想起している主観的現象の「火」、「傷」は「意味」という組み合わせとなる。

ここでソシュールは、言語学における〈形式〉と〈意味〉という用語を拡張して、人間の意味作用 (signification)² という現象の全般に適用するため、前者の目に見える客観的現象を〈シニフィアン〉(signifiant, 記号表現)、後者の心のなかに想起する主観的現象を〈シニフィエ〉(signifié, 記号内容) と呼び、その結合を記号 (signe, シーニュ) とした。そしてソシュールは、この記号を考察対象とする学問を記号学としたのである。つまり、言語記号における〈シニフィアン〉が〈形式〉であり、〈シニフィエ〉が〈意味〉ということになる。言語形式と言語以外の記号の〈シニフィアン〉は全く異なるものだが、意味の側から言えば、〈シニフィエ〉と言っても〈意味〉と言ってもどちらも主観的想念であるから質的な差異はない。このようにして記号学は言語学の概念と用語法を拡張するところから生まれたが、自然言語が記号の一種であることが合理的に説明されたことにより、むしろ新参者の記号学が古参の言語学を包含する関係性となった。

人間が自然言語を自ら創造したことの意義を宣揚したのはホモ・ロクエンスの人間観であるが、さらにもう一步、言語という営みを構成する素性として〈意味〉の世界に踏み込んだソシュールが創出した記号学の発展のなかから、後にホモ・シグニフィカンスの人間観が生まれたのである。この点は、次節以降に後述する。

ソシュールが着目したのは人間が現象から〈意味〉を読み取る行為だけで

はなく、〈意味〉を何かの具象に付与して新たな〈シニフィアン〉を創出する記号行為にまで及んだ。例えば、「煙」の色や本数に対して人為的に〈意味〉を「付与」し、それを仲間内で共有することによって仲間とのメッセージとしてそれを用いることができる。これがいわゆる狼煙（のろし）である。動物の糞を燃やすと煙が真っ直ぐに上がることからこの表記が用いられる。日本でも戦国時代に敵陣の兵士の人数を狼煙の本数で仲間に知らせていたことが知られている。

「煙」と「火」の関係は物理的な因果関係に基づいて必然的であるのに対し、どのような狼煙にどのような〈意味〉を持たせるかは一回的、臨時的な決め事であって恣意的である。しかし、どんなに恣意的な〈意味〉であってもそれを仲間との間で共有していれば、その〈意味〉はメッセージとして有効になる。ここで言う仲間との間のメッセージの決め事をソシュールはコード (code) と呼んだ。そのような目で人間の生活・文化を見渡してみると、〈シニフィアン〉と〈シニフィエ〉が結合した記号が満ちあふれている。

例えば、「貨幣」は硬貨・紙幣 (シニフィアン) と金銭的価値 (シニフィエ) が結合した記号である。「時計」は盤・時針・分針 (シニフィアン) と時刻 (シニフィエ) が結合した記号である。「楽譜」は五線・音符 (シニフィアン) と音の高さ・長さ (シニフィエ) が結合した記号である。「交通信号機」は赤信号・黄信号・青信号 (シニフィアン) と止まれ・注意せよ・進んでよいの交通指示 (シニフィエ) が結合した記号である。結局のところ「自然言語」もまた〈形式〉 (音声・文字、シニフィアン) と〈意味〉 (シニフィエ) が結合した記号の1つと位置づけられる。これら諸記号における〈シニフィアン〉と〈シニフィエ〉の関係性をごく簡単にまとめたのが表2である。

表2 記号におけるシニフィアン(記号表現)とシニフィエ(記号内容)

Signifiant 意味するもの 記号表現	血	煙	狼煙 (のろし)	貨幣	言語記号	
					/inu/ (音声)	“犬” (文字)
Signifié 意味されるもの 記号内容	傷	火	仲間への メッセージ	金銭的価値	犬の概念	
両者の関係	必然的		恣意的			
	解釈のみ		解釈と生成の双方向			

表2のような〈シニフィアン〉と〈シニフィエ〉の結合による記号の一般論的見地から言えば、自然言語は記号の一種であることは確かだが、その一方で自然言語は他の諸記号から隔絶した特殊な存在でもある。なぜなら、その複雑さと精緻さが二重分節(double articulation)³という特殊な構造によってもたらされており、それによって単に単語とそれに対応する概念の関係が恣意性をもった記号であるのみならず、語どうし、概念どうしの相互関係や全体の体系そのものもまた恣意性を有している点において極めて特殊だからである。この点を丸山(1983)では「言語は非記号的な記号である」という逆説的な表現を用いて述べている。

このように、自然言語には他の記号にはない特殊な概念どうしの複雑な体系性があり、ソシュールがその分析法を提示したことによって、その後の構造主義言語学の飛躍的な発展をもたらし、それが今日の現代言語学の基礎となっている。

その一方でソシュールの記号学は哲学的な議論にも大きな影響を与えた。言語における〈形式〉と〈意味〉の関係は、ソシュールの手によって記号における〈シニフィアン〉と〈シニフィエ〉の関係へと敷衍されたわけだが、この両者の関係は人間における客観世界と主観世界の関係とパラレルであり、延いては宇宙における物質と精神の関係にまで敷衍して論じることの可能性を内包している。デカルトの物心二元論、さらにはフッサール、ハイデッガー、メルロ＝ポンティらの現象学の議論とも連続した話題を提供する。次節では

記号学を哲学的人間学として展開したカッシーラーの主張について述べることにする。

4. カッシーラーとアニマル・シンボリクム

20世紀前半にソシュールの記号学を哲学および哲学的人間学として展開した人物がいた。ドイツの哲学者カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) であった。その主著である Cassirer (1944) 第2章において彼はまず、ドイツの生物学者ユクスキュル (Jacob Johann Baron von Uexküll, 1864-1944) の環世界 (Umwelt) を引き合いに出す。それはあらゆる動物的生命がそれぞれの感覚器官の成り立ちに応じた独自の知覚世界を通して環境と関連し順応すると考えるもので、その動物独自の知覚世界をユクスキュルは環世界と呼んだ。ハエにはハエの環世界がありウニにはウニの環世界がある。そして、それら異なる環世界がからみあって機能的円環 (Funktionskreis) という一つの連鎖をなしているとするものである。カッシーラーはユクスキュルが提唱した理論の大枠を認めつつも、人間の環世界である人間世界は他の動物の環世界と質的に大きく異なることを主張する。あらゆる動物の感受系と反応系の連結はどの種においてもそれぞれが画一的で合理的である。これに対して人間は、感受系と反応系の連結のあいだに、ただ人間のみが象徴系 (symbolisches System) という第三の連結がある点において独特なのだという。なぜなら人間は、環境世界をありのままに知覚するのではなく、あらゆる表象を象徴 (Symbol) として捉える構造と形式を持っている。例えば、自然現象を「神の意思」として読み取ることがあり、そこから神の怒りを鎮めるために祈りを捧げることもある。自然現象の意味を象徴として受け取り、そして、祈る行為においても象徴を創出している。このように人間の文化は個々の象徴によって構築された象徴の体系だというのである。しかもその体系は民族・文化によっても個人によっても多様性を有していて、それは必然性がなく非合理的でもある。このような人間の独特な象徴の世界をカッシーラーは像世界

(Bild-welt) と呼んだ。象徴系と称する第三の連結はこの像世界のことである。像世界においては現象世界を象徴として読み取るだけでなく、現実世界に実在しないユートピアを心に描くこともできる。その想像行為も像世界に構造を与える象徴の営みと解釈することができる。

ソシュールの記号学は記号の機能が先鋭化した記号専用のシニフィアンを持つ知的象徴に重点を置いている。例えば、貨幣、時計、楽譜といったそれぞれ独自のコードを持ったシニフィアンは、人間にとっての意味観念であるシニフィエ(金銭的価値、時刻、音の高さと長さ)を伝えるために恣意的なコードを用いて作り出した記号専用のシニフィアンである。この種の知的表象がソシュールによるコミュニケーションの記号学の中心的関心であり、現代言語学と連続する領域でもある。カッシーラーの記号学はそれよりも巨視的である。カッシーラーによれば、人間は像世界という象徴の宇宙に住んでおり、そこにおける様々な精神文化の所産である言語、科学的認識、芸術、宗教、神話がすべて象徴であって、それぞれの自立的原理に従って産出される、とする。

カッシーラーは、このような人間の精神文化の営みすべてを象徴と捉える人間観をもとに、人間の定義の変更を主張するまでに至った。人類史において人間が自らをアニマル・ラショナル(animal rationale, 理性的動物)と捉えてきたのはアリストテレス以来の伝統であった。アリストテレスは、人間は理性によって現象を認識する点において他の動物と異なると主張した。リンネの命名によるホモ・サピエンス(英知人)もこの伝統的な理解の範疇において人間を定義したものであった。しかしカッシーラーは、人間を真に定義する際立った特徴は、理性よりもむしろ人間だけが象徴の世界に生きていることであるとして、人間はアニマル・シンボリックム(animal symbolicum, 象徴を操る動物)であると主張した⁴。人類史上の精神文化はすべて象徴的な宇宙において創出したものである、と。このように人間の定義は、ホモ・サピエンス、ホモ・ロクエンスから、ソシュールの記号学を経て、カッシーラーによるアニマル・シンボリックムに至ったのである。

5. バルトとホモ・シグニフィカンス

カッシーラーの影響を受けながら、記号学の対象範囲をさらに大きく拡張したのがフランスの文化記号学者バルト (Roland Barthes, 1915-1980) であった。ソシュールの記号学は、独自のシニフィアン (記号表現) の形式を持ち、それとシニフィエ (記号内容) とをつなぐ明確なコードが存在する記号を扱う記号学であったが、バルトはそこから対象領域である記号の概念を大きく拡張し、コードの存在を必ずしも前提としない、より高度な意味作用を広く記号として扱うところまで記号学の領域を拡張した。その範囲は芸術論、文芸批評、文体論、社会批評の領域にまで及び、それによって記号学の存在価値を格段に高めたのであった。

バルトの記号学が従前の記号学と守備範囲を大きく異にすることに気づいていた人物の一人がフランスの記号学者ムーナン (Georges Monin, 1910-1993) であった。ムーナンは、この領域拡張の意義をより鮮明にするために、ソシュールの記号学を「コミュニケーションの記号学」(*sémiologie de communication*)⁵と呼び、それと対比して新たに拡張したバルトの記号学を「意味作用の記号学」(*sémiologie de signification*)と呼んで区別することを提唱した⁶。本稿では二つの記号学の名称に再三言及する煩雑さを避けるため、これ以降はコミュニケーションの記号学を「C 記号学」、意味作用の記号学を「S 記号学」と呼んで区別することにする。

バルトのS 記号学においてはソシュールのC 記号学が論じるシニフィアン (記号表現) とシニフィエ (記号内容) との関係について、記号の内的関係を示すものと位置づける。例えば、十字架 (シニフィアン) はキリスト教 (シニフィエ) を象徴し、赤信号 (シニフィアン) は通行禁止 (シニフィエ) を象徴する。両者は厳格なコードで結ばれている。日本の弁護士バッジ (天秤のアイコン) や国會議員バッジ (菊花のアイコン) について言えば、これらのバッジ (シニフィアン) はそれぞれの社会的地位 (シニフィエ) を象徴する記号であり、それらのバッジの着用を当該の有資格者のみに認めるという社会的な

コード (code) によって成立しているからC記号学の対象となる。

バルトは、記号の外的関係(記号どうしの関係性)のなかに新たな意味の生成を見出す。これに2種類あるとする。第1の外的関係はパラディグマティック (paradigmatique, 同系要素論的) な関係で、記号どうしが体系的な対立関係にある場合を指す。例えば、赤信号は黄信号、青信号と対立しており、赤であることは黄や青ではないことを同時に意味する。印欧諸語の屈折体系もこれに類する。ここまでは厳格なコードが存在するC記号学の領域である。

第2の外的関係はサンタグマティック (syntagmatique, 記号統合論的) な関係で、記号が文脈のなかに放たれてシニフィアン連合を構成するときには他の記号群とのあいだに新たな意味を生み出すことである。バルトの最大の関係は記号の第2の外的関係における無限の拡がりであり、ここからはS記号学のみがカバーし得る領域となる。

例えば、セーターのうえに革の上着を着るというシニフィアン連合は、構成要素であるセーターや革の上着という単独記号が持つシニフィエの合算以上の新たなシニフィエを生み出す。そして、それらを取り巻く文脈や人物もある種のシニフィアンであるから、それもまた新たなシニフィエの創出に寄与することとなる。いわゆる礼服、平服、普段着などの区別もまた、構成要素となる個々の洋服や公式場面・非公式場面といった文脈などのシニフィアンの合算であって、それらの境界線は曖昧で、そこから厳格なコードを読み取することは困難である。お葬式に普段着で行った者はやや非常識と見られがちではあるが、だからといって参列を拒否されるほどの厳格なコードは存しない⁷。このような服装の様式はS記号学の対象となる。実際にバルトは、個々の洋服のデザインや色合いのせめぎ合いやはぐらかしを記号として解釈し、そこから洋服の流行 (mode)、さらには時代 の精神性や思潮を読み取るという意欲的な著作を著している (Barthes 1967)。

バルトは記号論的な絵画批評にも着手した。キャンバスに描かれた風景画は大自然を「美の価値」として捉えた心象風景の記号と見る。そこには泉、

山、森、空、鳥といった個々の自然が持つ意味が視界、画角の文脈のなかで相互に関係し合い、トータルとしての意味の生成を読み取ることができる。Barthes (1964) は実にオランダの画家フェルメールの絵画批評から始まっている。

そしてバルトの名声を確認たるものにしたのは記号学的な文芸論、文芸批評であった。文学作品を構成する言語には音素と形態素という二重分節があり、それぞれがシニフィアンとして言語記号を構成する。そして、その言語を構成要素とする作品の舞台設定、個々の登場人物の名前や属性、登場人物どうしの出会いや事件の発生といった作品内の個々のエピソードなど、物語を構成するより高次の構成要素のそれぞれが、何かを象徴する記号のシニフィアンであり、それらが相互に関係することで作品全体が全く新しい意味をシニフィエとして生成し、読者に伝える。そのシニフィエは1つの単語だけでは到底表現し得ないような深遠な精神性であったり、愛とは何か、幸福とは何かといった哲学的な主張であったり、はたまた人間の本質的な苦悩であったりする。個々の記号は作品全体という記号体系のなかで1つの構造を作り上げ、作者からも離れてある種の自立した生命体となる。バルトは文学作品が持つこのような自律的な構造をエクリチュール (*écriture*, 書記言語) と呼んだ。文学作品は我々人間が経験したことのある世界を模倣するところから始まっているが、そこから全く経験したことの無い幻想の世界をもシニフィアンとして生成することができる。

バルトはエクリチュールが持つこのような自己構成力に着目しつつ様々な文学作品に対する記号学的な文芸批評を行っていった。それは、バルザック、ミシュレ、ボードレール、カフカ、パタイユといった作家たちの作品批評に及ぶが、いわゆる客観的な文芸評論とは趣を異にして、それ自体がある種の意味の生成に立ち向かったバルト自身の作品のようなものであり、これをバルト自身は、言語を記述するためのメタ言語 (*méta-langage*) になぞらえて、文学について語るメタ文学 (*méta-littérature*) であるとしている⁸。

人間の社会文化には、意味を生成する能力のある体系が満ちあふれてお

り、バルトは文学、絵画、衣服の他にも食物、映画などの記号学的批評にも着手している。さらに、聖書をはじめとする宗教的聖典もまた自律した生命体と独自の意味の世界を持つエクリチュールであることをバルトは認めている。かくして、エクリチュールはS記号学の重要テーマであるだけでなく、20世紀の現代哲学の思潮を読み取るキーワードとして重視されてきたのである。

このようにして見ると、ソシュールのC記号学が論じた記号の内的関係において生成する明確なコードを持った意味よりも、遥かに複雑でつかみどころがなく、とりとめのない大海のような意味の世界にアプローチして、それらのつかみどころのなさ挑戦して可視化を試みたのがバルトのS記号学であったと言える。

バルトは、このようなS記号学の立場を背景として、人間という生き物が持つ特性の普遍的な本質を、意味を生成する能力に求めて、人間をホモ・シグニフィカンス (Homo significans, 記号人) と定義したのである (Barthes 1964)⁹。

バルトのホモ・シグニフィカンスは、人間の記号生成能力を広く人間の文化全域に見出す点においてカッシーラーのアニマル・シンボリクムとはほぼ同義と言って差し支えない。両者を差別化するとすれば、カッシーラーは人類の言語、宗教、芸術、科学の歴史を総論的に俯瞰しているのに対し、バルトは文学作品や芸術作品、流行などの文化の諸相として現れているものに各論的にアプローチしている点異なる。記号学という学問の守備範囲を最大に広く取るためには両者ともに重要であり、優劣をつけることはできない。

カッシーラーやバルトによるS記号学は、さらに今日において幅広く応用されて学際的な社会評論、現代思想論として展開されるに至っている。この拡がり指して記号学を新たに記号論 (semiotics) と呼ぶことが現代では定着しつつあるが、記号学 (semiology) と記号論 (semiotics) の境界線は必ずしも明確であるわけではなく、本稿ではそのことについて特に論じない。

また、記号学史上、重要な位置を占める人物として、アメリカの記号学者・哲学者であるパース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914)、モリス (Charles

W. Morris, 1903-1979) と、もう一人、イタリアの記号学者・作家エーコ (Umberto Eco, 1932- 2016) を挙げたいが、紙幅を考慮して詳細は別稿に譲ることにする。

6. ホモ・シグニフィカンスの普遍性

ホモ・シグニフィカンス (Homo significans) の人間観は、人間が記号 (象徴) を操ること、そしてその本質を、意味を生成する能力と捉えるものである。その主張によれば、あらゆる人間観を包含するだけの普遍性を持つがゆえに、どの人間の定義もホモ・シグニフィカンスに還元することができる。

第1に、ホモ・サピエンス (Homo sapiens, 英知人) からホモ・シグニフィカンスへの還元。既にカッシーラーがアニマル・ラショナルからアニマル・シンボリックムへの転換を主張していることは第4節で述べた。それは、人間世界の理性の本質を、環境世界を象徴として見る象徴系が介在していることに帰結させる考え方である。これをバルトの視点で言い換えるならば、象徴系とは意味を生成する場であり、即ち「意味の懐胎」である。そして意味とは、理性によって統一された人格によって主体的・能動的に生成されるものである。ゆえに、アニマル・ラショナルからアニマル・シンボリックムへの転換は、ホモ・サピエンスからホモ・シグニフィカンスへの転換と平行である。

第2に、ホモ・ロクエンス (Homo loquens, 発話人) からホモ・シグニフィカンスへの還元。歴史的経緯から言えば、言語学から記号学が生まれたが、その合理的な説明により、言語は記号の一種であることが結果的に明らかとなった。即ち、言語という行為は、何かから意味を読み取り、そして何かに意味を付与する記号行為の一種と位置づけられることがソシュールのC記号学の論述によって明らかとなったのである。さらにバルトによるS記号学は、言語によってなされる小説、詩、神話、説話など、言語を構成要素とするあらゆるエクリチュールにおいて生成された意味を読み取ることの可能性、さらには絵画や映画などの芸術文化や衣服や食事といった日常文化にまで拡張で

きる可能性を示した。この段階でホモ・ロクエンスは完全にホモ・シグニフィカンスに還元されたと言っても過言ではないだろう。

第3に、ホモ・ファーベル (Homo faber, 創造人) からホモ・シグニフィカンスへの還元。フランスの哲学者ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) は人間の創造活動を人間の本質と定めたホモ・ファーベルの人間観を提示した (Bergson 1907) が、人間において衣食住の創造よりも、その原点である道具の創造よりも、さらに先立つのは主観世界における意味の創造である。その証拠に、人間が具象物を創造する際には必ずそれに先立って理想像という抽象概念を心に描く。例えば、建物を建てる前には完成予想図のパスを描く。パスは心に描いた理想像を絵画として描き出したものである。建物が完成してからそれを模倣して描いた絵画と結果的には同じものになるが、適合方向 (direction of fit)¹⁰ は逆である。鶏が先か卵が先かという論争があるが、この場合は明確に理想像が先行する。あのエジプトの巨大ピラミッドも、完成予想図を図面として外に描き出したかどうかはともかく、少なくとも作った人 (建設者集団のリーダー) の心のなかにはあったはずである。そして、その理想像たる象徴は価値の象徴でもある。人間はより美しいもの、より利のあるもの、より善いものを“心に描いて”、そして創造しようとして生きる生き物である。ゆえに、ホモ・ファーベルの創造性もホモ・シグニフィカンスの意味の生成に還元することができる。

第4に、ホモ・ルーデンス (Homo ludens, 遊戯人) からホモ・シグニフィカンスへの還元。人間は自己保存のための生理的な衝動とは無関係に慣習化された文化的な振る舞いに「快」や「美」を覚え、その慣習から外れた振る舞いには「不快」や「醜」を覚える。ここで言う文化的な振る舞いをオランダの歴史家ホイジンガ (Johan Huizinga, 1872-1945) は「遊び」と称し、人間をホモ・ルーデンスと定義した (Huizinga 1938)。ここで人間の文化において好ましい振る舞いとして確立した行為は、社会的コードによって人々に共有されたある種の記号である。例えば、西洋でナイフとフォークを使いこなすことは食事のマナーとして記号化されている。この種の文化記号はカッシーラーの

言葉を借りれば、他の動物においては感受系と反応系とが相即の関係にあるのに対し、人間の場合はそのあいだに象徴系という主観領域が介在する。この部分がホイジンガの言う「遊び」に相当し、それが個人における多様性、民族文化における多様性を産む。特に民族文化における多様性は当該民族内ではコードが共有されて厳格だが、他の民族文化とのあいだでは異文化衝突を発生させる可能性を孕む。このように見ると、ホモ・ルーデンスの「遊び」もまた、ある種の記号行為であるから、ホモ・シグニフィカンスの象徴性へと還元できるのである。

第5に、ホモ・パティエンス (Homo patiens, 苦悩人) からホモ・シグニフィカンスへの還元。あのナチスのホロコーストでの生き地獄を経験したオーストリアの精神科医フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) は人間をホモ・パティエンスと定義した (Frankl 1950)。彼は人間を科学的客観性の名のもとに数値的に分析しようとする生理学、心理学、社会学を、人間存在の意味を無視するニヒリズムだと批判した。ここで彼は「意味」という言葉を用いている。要は人間が心で経験する諸現象の意味、とりわけ苦悩の意味について誠実に立ち向かった人であった。彼の苦悩体験は特異なものであったが、人間は誰しもが大なり小なり苦悩を経験する。仏教の始祖・釈尊が生老病死の苦悩の超克を目指して若くして出家したことはよく知られている。フランクルはホロコーストから生還した自身の使命として、「人間はなぜ苦悩するのか」、「人間には苦悩が存在するのか」、即ち、「苦悩の意味」を問い続けた。人は苦悩をもたらした過去の原因を問うたり、逆に苦悩を乗り越えた未来の幸福を思い描いたりする。結局、苦悩は何かを象徴した記号なのである。フランクル自身は、苦悩とは神に対する犠牲であるという意味を付与することで彼なりの苦悩の超克を果たした。このように人間は「苦悩の意味」を問う生き物であるがゆえに、時には生きることに絶望して自死を選択したりもするが、時には苦悩の意味を見出して超克して生き抜いたりもする。このような観点から、ホモ・パティエンスが持つ「苦悩」の意味は、ホモ・シグニフィカンスが持つ人間の記号性の一部 (但し、重要な一部) として含まれている

ものと見なし、還元できると考える。

以上のようにホモ・シグニフィカンスには、他の人間の定義をすべて包含し、還元するだけの普遍性がある。その説明力の強さは、意味の生成という行為が人間の本質であるとするカッシーラーやバルトの主張が持つ説得力の強さを物語っている。

注

- 1 過去にホモ属に属し、その後絶滅した種の学名。ホモ・ハビリスは230万年～160万年前、ホモ・エレクトゥスは190万年～2万年前に存在したとされる。
- 2 池上(2002)では意味作用(signification)について「あるもの(こと)が、別のあるもの(こと)を表わす(あるいは、表わすと捉えられる)」ということ。このような場合、前者は『記号表現』、後者は『記号内容』とよばれるものに対応し、要するに前者の『あるもの(こと)』が『記号』として機能していることである」と説明している。これはソシュールの理論を単純化してわかりやすく説明したものである。
- 3 二重分節(double articulation)はフランスの言語学者マルティネ(André Martinet, 1908-1999)が自然言語の特性の1つとして指摘したもの。自然言語の最小単位には形態素(morpheme)と音素(phoneme)の二種があり、音素の組み合わせと配列を変えて形態素を作ること、有限の数の音素から無限の数の形態素を作れることを可能にしたとするもの。
- 4 Cassirer(1944) 宮城訳(1997) pp.65-67. symbolicumは古代ギリシャ語で「象徴の性質を有する」の意を表す形容詞の中性形。なお、アニマル・シンボリックをホモ・シンボリック(Homo symbolicum, 象徴人)と言い換えて引用する文献もある。
- 5 「伝達の記号学」と訳されることもある。池上(2002)など。
- 6 Mounin(1970) 福井他訳(1973) pp.9-15. 同訳では「意味作用」にシニフィカシオンというフランス語音写のルビが振られている。
- 7 ただし、社会の一部に学校の制服や高級レストランの服装規定のように、厳格なコードを有する事例は存在しており、それらはドレスコード(dress code)と呼ばれる。ドレスコードに基づく服装は弁護士バッジと同様にC記号学の対象となる。
- 8 Barthes(1964) 篠田他訳(1972)「文学と記述言語」pp.142-144.
- 9 Barthes(1964) 篠田他訳(1972)「構造主義的活動」p.298. なお、フランス語の“signification”や“signifiant”などの“gn”はフランス語の硬口蓋鼻音[n]で、日本語では「ニ」で音写して“g”が黙字(silent letter)扱いとなるが、“Homo significans”はラテン語であるため日本語の音写ではホモ・シグニフィカンスとなる。その日本語訳は端的に「記号人」とされることが多いが、その趣旨から言えば、「意味生成人」が最適と考

える。

- 10 「適合方向」(direction of fit) はアメリカの言語哲学者サール (John Searle, 1932-) が発語内行為 (illocutionary act) の分類基準として挙げた概念の一つで、言語と現象世界の関係づけの仕方を記述したもの (Searle 1979)。サールはその後に展開した心の志向性 (intentionality) の議論においては心と現象世界の関係づけの仕方に敷衍した (Searle 1983)。

参考文献

- 池上嘉彦 (2002) 「意味作用の記号学」『記号学大事典』柏書房
- 菅野盾樹 (1999) 『人間学とは何か』産業図書
- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』岩波書店
- 丸山圭三郎 (1983) 『文化記号学の可能性』日本放送出版協会
- 村上陽一郎 (1986) 『近代科学を超えて』講談社学術文庫
- 山岡政紀 (2009) 「人間学の探究 (2) ～人間の定義 (その1) ～」『創価人間学論集』第2号、創価大学人間学会、109-125
- 山岡政紀 (2024) 「人間学の探究 (8) ～人間の定義 (2) ホモ・ロクエンス～」『創価人間学論集』第17号、創価大学人間学会、139-156
- Barthes, Roland (1953) *Le Degré Zéro de L'écriture*, Paris: Éditions du Seuil. (邦訳: バルト著、石川美子訳 (2008) 『零度のエクリチュール』みすず書房)
- Barthes, Roland (1964) *Essais critiques*, Paris: Éditions du Seuil. (邦訳: バルト著、篠田浩一郎他訳 (1972) 『エッセ・クリティック』晶文社)
- Barthes, Roland (1967) *Système de la mode*, Paris: Éditions du Seuil. (邦訳: バルト著、佐藤信夫訳 (1972) 『モードの体系—その言語表現による記号学的分析』みすず書房)
- Bergson, Henri (1907) *L'évolution créatrice*, Paris: Les Presses universitaires de France. (邦訳: ベルクソン著、松浪信三郎・高橋允昭訳 (1966) 『創造的進化』白水社)
- Cassirer, Ernst (1923-1929) *Philosophie der symbolischen Formen*, Humburg: Meiner Verlag. (邦訳: カッシーラー著、生松敬三・木田元訳 (1989-1997) 『シンボル形式の哲学』(全4巻) 岩波文庫)
- Cassirer, Ernst (1944) *An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture*. New Haven: Yale University Press. (邦訳: カッシーラー著、宮城音弥訳 (1997) 『人間—シンボルを操る者—』岩波書店)
- Darwin, Charles (1859) *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. London: John Murray. (邦訳: ダーウィン著、八杉龍一訳 (1990) 『種の起源 (上・下)』岩波文庫)
- Eliade, Mircea (1976) *Histoire des croyances et des idées religieuses*, Paris: Payot.

- Frankl, Viktor E. (1950) *Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee*, Wien: Franz Deuticke. (邦訳：フランクル著、山田邦男・松田美佳訳 (2004) 『苦悩する人間』春秋社)
- Herder, Johann Gottfried (1772) *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, Berlin: Voß (邦訳：ヘルダー著、宮谷尚美訳 (2017) 『言語起源論』講談社学術文庫)
- Huizinga, Johan (1938) *Homo Ludens, a study of the play element in culture*, Boston: Beacon Press. (邦訳：ホイジンガ著、高橋英夫訳 (1963) 『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』中央公論社)
- Kant, Immanuel (1781/1787) *Aufgabe der Kritik der reinen Vernunft*, (邦訳：カント著、原佑訳 (1966) 「純粹理性批判 上」『カント全集第4巻』理想社、カント著、原佑訳 (1973) 「純粹理性批判 下」『カント全集第6巻』理想社)
- Linné, Carl von (1735) *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines, genera et species*.
- Mounin, Georges (1970) *Introduction à la sémiologie*, Paris: Les Editions de Minuit. (邦訳：ムーナン著、福井芳男他訳 (1973) 『記号学入門』大修館書店)
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique générale*, Paris: Payot. (邦訳：ソシュール著、小林英夫訳 (1972) 『一般言語学講義』岩波書店)
- Searle, John (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Act*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, John (1983) *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Adam (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London: Methuen.
- Uexküll, Jakob Johann von (1920) *Theoretische Biologie*, New York: Springer. (邦訳：ユクスキュル著、入江重吉・寺井俊正訳 (2012) 『生命の劇場』講談社学術文庫)